

今月の

用語

隣に伝えたい 新たな言葉と概念

【インパクトファクター (Impact Factor : IF)】

英 Impact Factor
略 IF

【用語解説】

インパクトファクター (Impact Factor:IF) は、学術雑誌の影響度を数値化するために、その雑誌が掲載したすべて論文の被引用回数の合計値 (=論文群の総影響度) を、論文の掲載本数で割って算出する指標である。特定のジャーナル (学術雑誌) に掲載された論文が特定の年または期間内にどれくらい頻りに引用されたかを平均値で示す尺度である。一般に言われる正式な IF は、現在はクラリベイト・アナリティクス社の Journal Citation Reports (JCR) が算出する IF が用いられ¹⁾ それ以外は自称インパクトファクターである。JCR に選ばれる学術誌はあくまで JCR が客観的指標で選定する。

例えば伝統的な科学総合誌の Nature や Science などの雑誌は IF が約42-41 (2017 In Cites Journal Citation Reports) であり、一つの論文が特定の期間内に平均30-40回引用されたことを意味する。IF 算出対象年に先立つ2年間における引用回数を、対象年に先立つ2年間にそのジャーナルが掲載したソース項目の総数で割ることによって IF を計算するため、出版社も出来るだけ重要な引用が期待される論文を期間内に引用されやすいように年初めの1-3月号に載せる傾向がある。IF はあくまでその学術専門分野内での学術雑誌の活性を比較する Journal Citation Reports (JCR) の提案した指標である。このため個人の評価と直接関係ないとの主張も多く出るが、実際に IF の高い雑誌に載るには大変な努力を強いられ、流行の分野や多くの人に関係する分野では引用は当然多くなり、逆にあまり流行していない分野やその人しかやっていない新奇性や独創性の高い論文は、その後2年間その研究や発見に誰もついてこれなければ、その論文の引用は0の場合もある。このような論文は2年たってから徐々に引用されてくる場合が多い。

近年テレビドラマでも IF はとりあげられている。かつては学術業績の評価は論文を積んだ厚みで決まると揶揄されてきたが、IF の出現以降論文の厚みではなくその IF の合計を個人の業績を評価する新たな手法として大学や研究機関の採用などに用いられた。研究者は自分の研究を出来るだけ高い評価の学術雑誌に載せたい一心で1点でも0.1点でも高い雑誌に投稿する努力をした。反面、日本語の雑誌や学会誌は英文誌でない為 IF がつくのは極く稀で、結果的に評価されにくい日本語では論文を書かなくなり、日本語の学術雑誌が学会誌を含め投稿の数が減ってきた。最近 IF の便乗商売も盛んで禿鷹出版社と言われる業者が、勝手に独自の IF を算出し高い点数を謳って著者に投稿依頼、出版費用を請求する詐欺まがいの事例も問題になっている。

このため IF の弱点や問題点についてもあらゆる角度から分析もされ²⁾、多くの IF に否定的な研究者や評論家もいるが、実際に研究を行い論文を書いている第一線の研究者にとって、IF はやはり公平かつ客観的な指標である。IF はあくまで雑誌の評価であり、個人の評価というより出身校のそれと似たところがあるかもしれない。「いい大学に入ったのに...」もあるが、「入ることに意味がある！」場合もある。

IF の高い雑誌の出版社や編集者は IF を下げないように、上げるように努力をしている。少なくとも学会の重鎮が、「私のところの〇〇くんが論文書いたので宜しく」、などといった、コネ論文は IF を下げるので、そのような論文が載る雑誌には IF はつかないはずである。このようなことを避ける意味でも IF は重要である。日本の学会誌に投稿しても相手にされず、英語で書き直したら IF がその分野の Top である雑誌に受理されたという話はかつてよく聞いた。

医療の分野は活発な研究がなされており、臨床医学の総合誌である NEJM (IF79)、LANCET (IF53)、JAMA (IF48) などは、あの Nature、Science より安定して IF が高い。基本的に専門性の高い研究は IF は低くとも、その専門医学分野の IF の高い雑誌を目標に掲載されるように挑戦すれば、実感として IF がいかに客観的な指標であるか、身をもって体験できると思う。

【参考】

1) <https://clarivate.jp/products/journal-citation-reports/impact-factor/>
(興味のある方や詳細はこちらへ、IFを決める会社のページ)

2) 山崎 茂. インパクトファクターを解き明かす. 東京: 情報科学技術協会, 2004 (INFOSTA ブックレットシリーズ).

(国立病院機構東京医療センター 角田 晃一)
本誌359pに記載